

組織の再建を施行した。再建された胸壁の動揺は軽度で、術後はレスピレーターなどの呼吸補助は必要とせず、良好な経過を辿った。

摘除された腫瘍は、臨床経過及び病理診断から腹壁に生じた隆起性皮膚線維肉腫の局所再発と考えられた。

18) 右上葉無気肺を契機に発見された気管支脂肪腫の1例

石山 貴章・土田 昌一 (秋田赤十字病院)
 藤田 康雄 (胸部外科)

肺の良性腫瘍は発生頻度が少なく中でも気管支脂肪腫は特に稀とされている。その頻度は肺腫瘍全体の0.1~0.5%程度といわれている。男女比では明らかに男性に多く、喫煙や肥満がその危険因子として考えられている。今回我々は、無症状下に胸部X線で無気肺を指摘された気管支脂肪腫症例を経験した。本症例は気管支鏡下生検では確定診断が得られなかったものの、CT画像上気管支脂肪腫を疑い手術を施行し、病理学的に確定診断が得られた。腫瘍は右上葉気管支に嵌頓しており、更に右上葉無気肺は不可逆性と考えられたため、手術は右上葉切除とした。本症例は気管支脂肪腫の典型例と考えられたので、若干の文献の考察を加え報告する。

19) 当科における胃瘻造設の現況

山田 明・阿部 要一 (新潟医療生活協同組)
 斎藤 智裕・横山 義信 (合木戸病院 外科)

近年、内視鏡的胃瘻造設術が盛んに行われているが、患者の状態は一般的には良好とは言えず、一旦合併症が発生すれば、致命的ともなりうる。われわれは、安全性を重視し、局所麻酔下に小切開による開腹下胃瘻造設を行っているので報告する。約2cmの横切開を左季肋部下におき、腹直筋を離断し開腹する。胃体下部前壁大弯を引き出し、小孔をあけ14Fr. フォーリーカテーテルを胃内に挿入する。バルーンを膨らませた後、Stamm・Kader型に胃瘻を形成する。腹膜と胃瘻近傍を全周性に縫合固定し、創閉鎖を行いガーゼドレナージュをおく。過去1年間に11例に施行したが、手術時間は約30分であり、合併症の発生は認めていない。安全性を考えれば、本術式は非常に有用と考える。

20) 外傷性十二指腸損傷の二例

野上 仁・高野 征雄 (秋田赤十字病院)
 谷 達夫・武者 信行 (外科)

平成2年から11年の10年間に当院において手術の対象

となった腹部外傷は61症例(損傷部位87)であった。そのうち2例が十二指腸単独損傷であった。一例は診断に苦慮し受傷5日目に十二指腸後腹膜穿孔の診断がなされ手術となった。一旦退院となったが、受傷159日目に消化管出血によるショック状態となり緊急入院。腹部血管造影検査にて偽性動脈瘤を認めた。一例は来院時に十二指腸造影を行い早期に診断が得られた。

十二指腸単独損傷は腹部外傷の中でも頻度は低く、特に後腹膜穿孔は診断が非常に困難であるが、発症から24時間以上経過したものは予後が悪く、早期診断早期治療が望まれる。また、損傷部位に偽性動脈瘤を形成した例は検索し得た限りでは報告はなく、非常に稀な症例であったのでここに報告した。

21) 胆嚢十二指腸瘻を伴う胆石イレウスの一例

大矢 洋・三科 武
 鈴木 聡・二瓶 幸栄
 山崎 哲・鈴木 律子 (鶴岡市立荘内病院)
 登坂 有子・松原 要一 (外科)

胆石イレウスは胆石症の合併症の中では比較的稀な疾患である。今回我々は胆嚢十二指腸瘻形成後胆石イレウスを発症した一例を経験したので報告する。症例は74歳女性。腹痛を主訴に来院、胆石症、胆嚢炎の診断で入院。腹部CTで胆嚢周囲に腫瘍形成認められたがその後解熱、上部消化管内視鏡にて十二指腸球部に瘻孔形成を認めた。胆嚢炎軽快後手術目的に当科入院したところ、翌日より嘔吐あり腹部単純撮影で胆石を腸管内に確認。胆嚢十二指腸瘻、胆石イレウスの診断で手術施行した。胆石は空腸内で嵌頓しており空腸切開取石術及び胆嚢摘出、瘻孔閉鎖術施行した。本症例は内胆汁瘻の診断後胆石イレウスを発症する経過を追えたことで、胆石イレウスの発症機序解明の一助になり得ると思われる。

22) 悪性類似良性疾患 - Ductal Adenoma の一例

桜井加奈子・親松 学
 佐藤 信昭・小山 諭
 林 光弘・神林智寿子 (新潟大学)
 畠山 勝義 (第一外科)

症例は60歳女性、97年9月検診で右乳房に腫瘤を指摘され10月31日当科紹介。触診上右乳房D領域に5mmの弾性硬の腫瘤を認めた。マンモグラフィでは微小分葉状の辺縁の腫瘤像を認め、内部に集簇多形性の石灰化があり充実腺管癌、または乳頭腺管癌と診断した。超音波検査では、6×7mmで辺縁にboundary echoを伴うモザイク状の腫瘤影を認め硬癌、または乳頭腺管癌と

診断した。MRIでも早期濃染を示す17mmのスピキュラを伴う腫瘤像を認め硬癌と診断した。しかし穿刺吸引細胞診はクラスⅡであった。確定診断目的に12月11日摘出生検を施行し最終病理診断は ductal adenoma (DA)であった。DAは悪性類似良性疾患の一つとして最近注目されている新しい疾患概念である。

23) 膵内胆管切除を施行した憩室型先天性胆道拡張症の1成人例

小林 孝・松尾 仁之(新潟臨港総合病院)
高久 秀哉・三輪 浩次(外科)
黒崎 功 (新潟大学第一外科)

要旨: 憩室型先天性胆道拡張症は非常に稀な疾患で憩室が切除された報告はほとんどない。今回我々は、憩室炎で発症した膵内胆管の憩室型先天性胆道拡張症に対し、膵内胆管切除により憩室を摘出し得た症例を経験したので報告する。症例は56歳、男性。背部痛、嘔気・嘔吐、発熱で発症し、肝機能異常を指摘され精査目的で入院となった。内視鏡的逆行性膵胆管造影で十二指腸乳頭開口部から16mm肝側の膵内胆管に憩室と考えられる突出した陰影があり、その内部に結石透亮像を認めた。胆嚢と胆管内には結石を認めず、胆管膵管合流異常もなかった。超音波内視鏡で憩室内の結石を確認した。憩室内のみに結石を伴った憩室型先天性胆道拡張症と診断し、憩室を含めた膵内胆管切除術、胆嚢摘出術を施行、総胆管十二指腸吻合で再建した。切除標本では膵内胆管に外径8mmの巾着型の憩室があり内部に直径5mmの純コレステロール結石が一個存在した。術後経過は順調であった。

24) インスリノーマの一例

津田 祐子・田島 健三
若桑 隆二・岡村 直孝
内田 克之・草間 昭夫(長岡赤十字病院)
島影 尚弘・黒崎 亮(外科)

症例は21歳男性。低血糖発作にて発症。インスリノーマを疑うも、術前の画像診断では局在は不明。唯一血管造影で、膵頭アークードから頭部上縁に淡い染まりを認め、Ca 動注負荷肝静脈血インスリン測定(ASVS)では、胃十二指腸動脈からの負荷で有意に上昇した。術中所見では胃十二指腸動脈起始部近傍に直径1.5cmの膵外腫瘤を認め、異所性インスリノーマと判断し、切除した。術中経時的にインスリン値の増減をモニタリングし、病巣切除の指標とした。

インスリノーマは画像診断の困難な症例が多く、異所

性は1-1.5%といわれる。本症例ではASVSは有用であった。また局在不明例、10-12%といわれる多発例の確実な切除において、術中の経時的インスリン測定は有用ではないかと考えられた。

25) hemosuccus pancreaticus の1例

山崎 俊幸・山崎 英博(新潟南病院)
外科

hemosuccus pancreaticusとは、膵管を經由した Vater 乳頭からの出血を意味し、多くは嚢胞を合併した慢性膵炎に生じ、致死率が高い稀な病態である。症例は59歳女性。2年前に急性膵炎の既往があり、本年1月21日左上腹部痛と吐血で発症。翌日近医で内視鏡をうけたが出血源同定できず紹介入院した。入院時 Hb 5.2g/dl、左上腹部に腫瘤を触知した。24日内視鏡にて Vater 乳頭からの噴出性出血と、CTにて高度造影部分を内包する嚢胞を膵体部に認め、慢性膵炎の仮性嚢胞内出血と診断した。緊急手術(膵体尾部切除術)を施行、術後19日目に退院した。病理診断は慢性膵炎で仮性動脈瘤の所見はなかった。文献上、治療法は手術が確実とされているが、近年では塞栓術が有効であったとの報告もある。自験例では血管造影設備を有しないため、即手術を選択した。

26) WDHA 症候群を呈した膵 VIP 産生腫瘍の一切除例

長谷川 潤・穂苺 市郎(新潟労災病院)
豊田 精一・相馬 剛(外科)

【緒言】VIPの過剰分泌により惹起されるWDHA症候群はまれな疾患で本邦では30余例を数えるのみである。我々は、血中VIPが高値を示しWDHA症候群を呈した膵VIP産生腫瘍の一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】66歳、女性。PBCにて通院加療中であったが1日に10回ほどの水様性下痢を主訴に来院した。血中VIPが1300pg/mlと高値を示し、CTでは膵尾部に径5cmの充実性腫瘍を認めた。膵尾部VIP産生腫瘍によるWDHA症候群と診断し、膵体尾部切除を行った。免疫組織学的にVIP、PP、Insulinが陽性の多種ホルモン産生腫瘍であった。術後は下痢は消失し血性カリウム値は正常となった。術後一年経過した現在、再発なく外来通院中である。